

自然再生と聞くとどうしても大規模なものを想像してしまいが、費用が安価で、子どもからお年寄りまで誰もが気軽に参加し、そして時には失敗をしながらも活動の効果が短期間で目に見える、そんな地域による取り組みが「小さな自然再生」。

例えば、川の上下流の連続性を回復するための手づくりの魚の通り道づくり、生きものの生息環境や産卵環境を整える場づくりなどなど、本事例集でもたくさん取り組みを紹介させて頂きました。

あなたの近所の水辺を自分達のお庭の様な感覚で、またこれまで通っていたスポーツジムの代わりに気持ちのよい汗をかく場として、日曜大工感覚で地域の仲間とともに楽しみ、水辺の管理者と地域の未来について語り合いながら、気軽に取り組む「小さな自然再生」をあなたもはじめてみませんか？

「小さな自然再生」研究会 とは？

「水辺の小さな自然再生事例集」（2015 年 3 月発行）の制作を目的に、小さな自然再生の専門家、行政担当者、若手技術者等の 15 名の有志による『「小さな自然再生」事例集編集委員会』が 2014 年 6 月に結成されました。その後、新たな仲間を増やしながら本活動を持続的に発展させていくため、これまでの事例集編集委員会を『「小さな自然再生」研究会』に 2016 年 7 月に改称しました。

（幹事：日本河川・流域再生ネットワーク：JRRN）

「小さな自然再生」研究会 メンバー参加方法

「水辺の小さな自然再生ホームページ」内のメンバー申込欄より、「メールアドレス」・「氏名」・「所属組織名」をご登録頂くことで、どなたでも「小さな自然再生」研究会のメンバーになることができます。

ホームページ： <http://www.collabo-river.jp/>

研究会メンバーの皆様には、小さな自然再生に関わる研修行事等の案内や関連情報を不定期にメールにて配信させて頂きます。たくさんの皆様のご参加をお待ちしております。

「小さな自然再生」研究会メンバー募集中！

巻末 2

水辺の小さな自然再生の事例を募集しています！

巻末 1

多くの方々に「小さな自然再生」に関心をお持ちいただくようになりました。しかしながら、技術面でも効果の検証面でも、まだまだ不十分などところがあるのが実情です。

実際の作業において、作業者が技術を習熟しているとは限りません。また、生態学の分野から対立が生じるかも知れません。しかし、地域の自然を再生するためには、多くの主体が自らの発案で参画し、多くの協働者を得て進めて行かなければ、現実的には前に進まないという側面もあります。参加する主体が多様になれば、社会教育という観点からも技術体系も求められるでしょう。

「小さな自然再生」という取り組みは、まだまだ事例が少なく、十分な技術体系ができていません。これらの完成度を高めるためには、優れた事例だけでなく、工夫が凝らされ、課題が整理されている事例を集めることが必要だと私たちは考えています。また、個々の事例を、閲覧できれば分かつとおり、実に多様な主体による関わり方と運営方法があります。小さな自然再生がより一層色々な場所で展開されてゆくためには、土木の技術、生態学の技術、地域や社会との関係の技術など幅広い観点からの知識と知恵の整理が求められています。そこで、「小さな自然再生」研究会では、水辺で取り組む小さな自然再生の全国の事例を収集整理し、その成果をオープンに共有できるデータベースを運営しています。

小さな自然再生に関わる事例を情報提供頂ける方は、是非とも研究会事務局（info@a-rr.net）までご連絡ください。事例募集の詳細は以下のページにてご覧頂けます。
http://www.collabo-river.jp/201810cases_request/
皆様からの事例情報の提供をお待ちしております。



<http://www.collabo-river.jp/>

本書8ページの3枚の写真に示されている3つの書物と、9ページの写真に示される「小さな自然再生サミット2019神戸大会」の開催は、水辺の小さな自然再生への取組み、その技術・定義・効果・事例の集積などに関して、それぞれが時代の「道しるべ」となった成果であると考えることが出来ます。言い換えれば、これらを辿ることにより「水辺の小さな自然再生」が辿った歴史の核心的な部分を短時間で知ることが出来ると思います。筆者は4枚の写真のうち、後半の2枚に関わる活動に参加してきたので、今回の「水辺の小さな自然再生事例集 第2集（以下では、事例集212020年と記す）」の出版を大変嬉しく感じています。

今回の事例集212020年には、14の事例が取り上げられています。最初の事例集（2015年）には13の事例が取り上げられていますが、両者での重複は1例であり、今回の13例は新しく取り上げられた活動となっています。また、今回の内の5例は前回取り上げられていない県における活動であり、水辺の小さな自然再生が、多くの県で行われている証左となっていると思います。地域として考えてみると、東北地域と沖縄・奄美地域は未だ報告例がないことになります。こうした概略の姿を念頭に置いて、事例集212020年を眺め、それを通して今後への期待を探ってみたいと思います。

1. 継続することの大切さ

従来の「水辺の小さな自然再生事業」に関する知見の上に立つて、事例集212020年を眺めて感じられることは「継続することの大切さ」です。したがって、過去から現在に至る総括としてこの標題を取り上げました。そして、その内容は、

その1. “継続から深化が生まれる”、ということと、

その2. “継続から広がりが生まれる”、にまとめられます。

「継続から深化が生まれる」例として挙げられる事項は、事例集212020年では調査内容がより深く、より広くなりつつあります。また、調査期間が長くなることにより、新しい知見が得られ、より詳しい理解が進んでいます。さらに、作業に採用されている工法や、作業機器に進歩が見られます。

事業の資金調達では“クラウドファンディング”による実施例が2件（2015年と2018年）見られました。実施の年から見ると前回の事例集発行よりも後の年次であり、新しい動きであると位置付けてもよいと思われます。

「継続から広がりが生まれる」例としては、事業を実施した対象区域の広がりがあります。

従来の事業は河道内の低水路部分で行なわれていましたが、事例集212020年では、高水敷における事業や、河道と隣接する旧氾濫原（休耕田）において実施された事業が含まれています。休耕田における自然再生事業は、地域の生活者との協働も密度が高くなると考えられ、今後の展開が期待される分野であります。また、大都市の中心市街地における事業も紹介されており、多くの市民に認知してもらえる効果は大きなものになると期待されます。

2. 今後への期待

事例集212020年において、既にその芽が顔を出していますが、今後さらに発展が望まれる面は次の3つであると指摘したいと思います。

その1. 技術面では“感覚から構造へ”、

その2. 地域的な面では、“河道から流域へ”、

その3. 管理的な面では、“管理者の水辺からみんなの水辺へ”、です。

技術面では、公開されている流れの解析ソフトRcを使いこなす滋賀県の高校生の例が、本書の112で紹介されています。このような活動により、自然らしさが流れの構造から説明されてゆくと素晴らしいと思います。

小さな水辺の自然再生活動においては、活動の主体は既に地域住民の方々の参加によって成り立っています。この項で述べているのは、活動を行う場所に注目しています。本書においても河道から飛び出した場所での活動が紹介されています。こうした活動が更に伸びて行くことを望ましいと思います。

河川管理者以外の主体が参加できることが、小さな自然再生事業の特徴の一つであると思います（本書7ページ参照）。大きな洪水の管理、流域全体に関する水の利用並びに河川全体に関する河川環境の整備計画は河川管理者が法律に従って決めますが、規模の小さな河川、天候が静穏な場合の河川においては、水辺は周辺に住む人々の“みんなの水辺”であると思います。本書12ページの“見守る公助”もこうした考えを表わしているものだと思います。

事例集212020年が多くの人々に活用され、この中に現れている幾つもの芽が今後成長して行くことを楽しみにしています。

できることから始めよう 水辺の小さな自然再生事例集 第2集

2020年3月

【編集】

「小さな自然再生」研究会

【企画・構成】

吉富友恭 東京学芸大学環境教育研究センター

【デザイン】

本間由佳 明星大学 デザイン学部 デザイン学科

【発行】

日本河川・流域再生ネットワーク (JRRN)

〒104-0033

東京都中央区新川1丁目17番24号

NMF 茅場町ビル7階

公益財団法人リバーフロント研究所 内

[電話] 03-6228-3865 [Fax] 03-3523-0640

[E-mail] info@a-rr.net

[URL] <http://www.a-rr.net/jp/>

[Facebook] <https://www.facebook.com/JapanRRN>



表紙写真：新潟県佐渡市・久知川でのホタル復活の取り組み

※本書は、(公財) 河川財団の河川基金の助成を受けて作成されたものです。